

ラオスの こども通信

73号
2018年8月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 読書の楽しさ、伝えたい▶p.1
- はじめる・つながる・つくりだす▶p.3
- 「ラオスのこども」の仲間たち▶p.4
- メコンのほとり「債」▶p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

読書の楽しさ、伝えたい

「村の文庫？ なんだろう」

ナパファ村、首都ヴィエンチャンから車で約3時間のサナカム郡にあります。バナナの栽培や家畜の飼育を中心に農業を営んで暮らしています。この村に住むペポイさん(14歳)は、2015年のある日、村長さんから「村の文庫がオープンしたよ」と聞きました。

でも、そのときは「村の文庫って、なんだろう？」と思いました。というのも、村には市場や小さなお店はありますが、本を売っている店はありません。学校にも図書室はなく、村の文庫ができるまで、教科書以外の本を手にしたことがなかったからです。



集会室の中に「村の文庫」がオープン

「本が読めるところ」でボランティア

ペポイさんは、「村の文庫は本が読めるところ」と友だちから教えてもらい、村の文庫に行ってみました。そして、生まれて初めて絵本と出会い、読書の楽しさを味わったペポイさんは本のとりこになりました。

週末など時間を見つけては、友だちを誘って村の文庫で本を読み、小学生たちがやってくると、「この絵本、面白いよ」と声をかけました。楽しそうに絵本をめくる小さな子たちを見ては、「読書の楽しさを多くの人に伝えたい」と思い、中等学校(中学+高校)4年生になると仲間たちと図書ボランティアを始めました。ペポイさ

んたち3人の学生ボランティアは本の整理や貸し出しの手伝いなど活躍しています。



大きな菩提樹。その横に村の集会室

もっと本を

村の文庫は、子どもたちだけでなく、大人たちにも利用されています。農業が盛んな地域のため農業の本の貸出が多くあります。中には本から学んで有機肥料作りをしている村人もいます。また、ラオスの文化や伝統を紹介した本も人気が高いそうです。自分たちが何気なくする儀式の意味を知り、それをコピーして自宅に貼りだした人もいます。文化や伝統を紹介する本は人気が高く、村長さんに追加で入れて欲しいと要望しているそうです。



農業、文化などの本は大人に人気

文庫の魅力をもっと高めるために

文庫は村の中で情報発信の役割を担っています。また、子どもたちが、読書を通して自分の世界を広げる場にもなっています。「人気がある本や参考書をもっと増やして、文庫をより魅力ある場所にできたら嬉しい」と、ペポイさんは思いを語ります。

本をさらに増やして、村の文庫の魅力を高め、ペポイさんのように、本のとりこになる子どもたちを増やすお手伝いを、「ラオスのこども」は続けていきます。



文庫にやってきた小学生たち

地域文庫(村の文庫)とは？

「ラオスのこども」は、長く学校を中心に図書室の設立・運営支援をし、さらに2014年からは「地域への展開」を進めています。地域の子どもの大人も本を読む機会を提供することを目的に、村の中で文庫の開設と運営を支援するものです。ヴィエンチャン県、ルアンナムター県の16か所で開設し、現在もサポートを続けています。

応援してください！

まったく本がなかった地域に文庫が開設され、読書の楽しさを知り、「読書の楽しさを多くの人に伝えたい」と、図書ボランティアとして活躍する子どもや大人が生まれつつあります。現在、ナパファ村の文庫の蔵書数は675冊。これに対し、住民の数は2,432人。まだまだ少ないといえます。

開設した村の文庫8か所それぞれに約160冊ずつ、合計約1300冊の本を届けることをめざし、現在、夏募金を実施しています。目標額は2018年9月末までに100万円！7月31日までに合計435,800円の寄付をいただきました。心から感謝申し上げます。引き続きご協力をお願いいたします。

伝統織物のすばらしさをもっと多くの人に

2018年4月25日～30日、京都でラオス織物の展示即売会を開催しました。京都では3回目の開催です。会場の京都市左京区鹿ヶ谷町のギャラリー「桜谷町47」には、黒檀、紅の木、藍、ジャックフルーツなどラオスの豊かな自然の恵みで染めた温かい風合いの布や、各民族に伝わる織りや刺繍が施された表情豊かな絹織物が並びました。

いろとりどりの表情豊かなショール

展示作品の多くは、首都郊外の静かな森の中にたたずむホアイホン職業訓練センターで製作されました。ラオスの伝統織物文化の保存と女性の就業支援をめざすセンターでは、ラオスの女性が技術を習得するだけでなく、世界各地からラオスの織物文化に魅せられた人たちが学びに来ています。



伝統技術と織手の感性から新しいデザインが生まれる

センターは、「ラオスのこども」の代表チャントソン・インタヴォンがJICAの協力を得て1998年に設立しました。今年で20周年にあたります。

展示会での講演会でチャントソンは、田舎の市場で外国人に買い叩かれ海外で高額で取引されるラオスの織物を見て「ラオスの伝統織物文化や、それを担う女性たちの誇りを守りたい」という設立時の思いと、現在に至る歩みが語られました。

「どうして京都で開催？」と問われたチャントソンは「仕事で京都を訪れ、ラオスと同じように染めや織りの文化が豊かな京

都に親しみを感じるようになり、京都でのラオスの織物展示が夢でした。これからも織物を通してラオスと京都の架け橋になれるよう続けていきたいです」と話しました。



地方の一般家庭で作られる見事な織物

来場者には染織を生業としている方も多くいます。展示作品には、購入するのをためらってしまうような値段の作品もありますが、「技術の高さはさることながら、織り手がこの一枚にかけた時間と手間を考えると、素晴らしい作品をこの値段で販売するのはもったいない」と熱心に助言してくれる方がいます。初日、朝いちに駆けつけてくれた西陣織りの工房で働いている女性は、「昨年の展示会で気になる作品を見つけたけれど、買わずに帰り、1年間後悔していました。今回また素敵なお布と出会い、手に入れることができ、大満足」と話します。ラオスの女性たちが織りあげる布やそれを使って作られる服や小物は、世界でたった一つの作品です。ラオスの伝統織物の素晴らしさを多くの人に届けられるよう、今後も京都や東京で織物展を定期的に開催していきます。展示会開催や委託販売に協力してくださる方も探しています。ご関心のある方は、ラオスのこども事務局までお知らせください。



はじめる・つながる・つくりだす

【あらたに2校で図書室を開設】

■ 開設日：2018年2月13日

開設場所：ナーファイ中等学校(ヴィエンチャン都パックグム郡)
生徒数：315人 教員数：15人 蔵書数：647冊

＜支援：千葉港ロータリークラブ＞

千葉港ロータリークラブからは2回目の支援をいただき、昨年引き続き、現地訪問が行われました。開設式では鈴木芳明会長(当時)から、「図書室を使ってたくさん勉強してください」と力強いメッセージが送られました。また、同クラブの皆さんは当会の「ラオス語絵本プロジェクト」に協力し、日本語の絵本にラオス語の翻訳シートを貼って、250冊届けていただきました。

開設式



開設式は、生徒の代表、教員、父母会や地域の代表、県や郡の教育局職員、ラオス国立図書館職員などが参加しました。千葉港ロータリークラブの皆様も参加してくださいました(後列右側)。

ラオス語訳を貼った日本語の絵本を蔵書登録



図書委員の生徒たちは、登録作業をしながら、「新しい本がたくさんあって読むのが楽しみ」と語っていました。

寄贈リストと届いた図書が間違いないか、確認



手伝う生徒たちは、思わず本を開いて読み始めて。

■ 開設日：2017年12月26日

ナーカイ中等学校(カムワン県ナーカイ郡)
生徒数：315人 教員数：15人 蔵書数：647冊

＜支援：福岡那の香ライオンズクラブ＞

福岡那の香ライオンズクラブの支援による学校図書室開設は、ナーカイ中等学校で10校目です。10年に渡って毎年1校ずつ開設し、これまでに4県で2小学校8中等学校に開設することができました。4月18日、福岡で同クラブの20周年記念式典が行われ、代表のチャントソンが、継続したご支援にお礼申し上げました。

図書室の入口に看板を取り付ける



当会が開設支援した図書室は、この看板を掲げます。支援者名前を入れています。ラオス語の「HAK(愛する)」「ARN(読む)」から、愛読という意味を込めて、図書室をHAK ARN(ハックアーン)という愛称で呼んでいます。

貸出の方法を習う



国立図書館職員から図書貸出の方法を習います。ほとんどの生徒、先生が図書室の利用経験がないため、丁寧に研修します。

運営の仕方を話し合う



研修の最後は、図書室をどのように運営していくか、話し合います。何時から何時まで開けるか、ルールなどを自分たちで決め、自分たちの図書室を自分たちで運営する意識が強まります。

「ラオスのこども」の仲間たち

多様な民族のラオスだからこそ、読書の機会を

セン トー/ラオス事務所スタッフ

北部シェンクワン県で生まれ育ち、高校卒業後は、観光地として有名なルアンパバーンにあるスパスヴォン大学で農業、特に動物学を専攻しました。卒業後は農事会社で一年働いたものの、もっと人と直接関わりたいという思いから、開発の道に方向転換し、シェンクワン県で活動する日本のNGOで4年間働いた後、「ラオスのこども」に加わりました。事業担当スタッフとして、学校図書室や村の文庫の開設と運営をサポートしています。



文庫の活動記録のつけ方をペボイさんにアドバイスするセンさん

母語であるモン語、公用語のラオ語、そして英語を話す彼は、少数民族の子どもたちが学校でラオ語を獲得することの重要性を語ります。「子どもたちは、家では民族の言葉しか話さない。学校以外のいっただいどこでラオス語を覚えるのか。学校でラオ語の基礎を習得してなければ、その先に進学することも将来を考えることもできない」

子どもたちのラオ語習得の環境を整えるためにも、「ラオスではまだまだ本に触れあう機会が限られているので、読書習慣の普及に貢献したい」と意気込みを語ります。

朝、出勤すると大量のゆで卵を作っておやつに食したり、プロテインを飲んだりしています。もともと痩身でなかなか太れないとのことで、「もう少し力強くなりた」と一念発起して地道な努力をしています。そんな彼を横目で見つめ、「自分の肉をあげたい」と、ダイエットをしたい同僚スタッフはつぶやきます。

表紙の写真

ナバファ村の文庫でボランティアをするペボイさん。通っていた小学校に図書室ができたのは、卒業した翌年でした。今通っている中等学校に図書室はありません。村の文庫のボランティアを一緒にしている友だちとは、「学校の勉強に役立つ本(参考書など)があって助かるよね。授業でつまずいても、文庫に置いてある本で勉強ができるからよかった」と話しています。だから、文庫がないとほんとに困る。そんな切実な思いもあって、ボランティアを続けているのです。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 73号

2018年8月発行 編集人: 森 透

発行: Action with Lao Children / DeknoyLao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: alctk@deknoylao.net

http://deknoylao.net

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分

郵便振替 00140-6-462494

メコンのほitori債

中老鐵路、タラートチーン

2018年2月、ヴィエンチャン県を視察した際に撮りました。首都の直ぐ近くまで中国の鐵路が来ていました。まだ線路や線路橋は敷かれていませんが、柱脚はずっと北へ伸びています。

「中老鐵路」(中国ラオス鉄道) といって中国との国境にある町のポーテンとヴィエンチャンを結ぶ鉄道です。将来的には、雲南からタイを經由してミャンマーまでつながるとか。中国の進めている一帯一路戦略事業の一つでしょう。

この15年ほど、ラオスでの中国の存在感は強まる一方です。ヴィエンチャン都内各所にタラートチーン(タラートは市場、チーンは中国の意)がオープンし、建設用材から日用品、子どもの文具まで、ありとあらゆる中国製品が売られています。

地方都市では中国資本が建設工事を進めていて、中国人技術者、労働者が入っています。街道筋のゲストハウスも中国語表示の看板を立て、中国のセメント会社や電線会社など様々な会社の大きな看板が目につきます。

気になるのは、これらの建設事業の多くが中国政府からの借款によるものらしいことです。将来、この負債をラオスが返済できるのか、このところつぶやかれている「債務の罠」が気になります。(野口朝夫/事務局長)

